

アメリカ人種学派の科学

—その疑似性にかんする一試論—

清水 忠 重

はじめに

アメリカ史のうえでアンテ・ベラムの時期は自然科学の発達における一画期をなすとされている。この時代のひとびとは結社活動に多大な関心を示した¹が、この傾向はそのまま科学界にもあてはまると言ってよく、ちなみに1785—1845年の期間、「フィラデルフィア化学協会」「アメリカ地質学協会」「フィラデルフィア・リンネ協会」「ワシントン植物学協会」など総数107にのぼる科学協会の設立をみたのにたいし、1845—65年の20年間にはじつに316を記録にとどめ、1863年には国立科学アカデミー (National Academy of Sciences) 設置の法案が議会と大統領の承認を得るにいたっている。ベンジャミン・シリマンの『アメリカン・ジャーナル・オブ・サイエンス』(1818年創刊)のような多少とも専門的内容をそなえた学術雑誌の創刊が緒につくのもこの時期以後のことである²。この期を代表する知識人のひとり R.W. エマソンといえば、そのロマンティズム、トランセンデンタリズム、プラトニズム、オリエンタリズムへの傾倒とつよい倫理的志向のゆえに科学とはおよそ無縁な人物であったかのように想定されがちであるが、この人物ですら自己の生きた時代を「科学の時代」、科学が「時代の支配的影響力」と化した時代とよび、またかれじしん天文学への深い関心からしてコペルニクス、ケプラー、ガリレオそしてとりわけニュートンの所説にふかい愛着の念を示したのであった。しかもエマソンは69歳という晩年の時期にあってすらなお、「もし完全な余暇に恵まれたなら、わたしは地質学、化学、鉱物学、植物学にかんして第一級の講義を聴講させてくれるような大学ないし科学の学校に馳せ参じたい」とのべて、当時みなぎっていた並々ならぬ科学的関心の一端を表明したのであった³。こうした趨勢はだいたい対英戦争 (1812—1814年) あたりを境におこったとみてよく、これ以後アメリカの科学者たちは従来のブッキッシュな抽象的論議にかえて次第に経験的な諸事実を重視する方向へとむかい、かつそれとともに科学もそれまでの宗教的ドグマによる制約とそれへの依存から漸次脱却し、学問的自立化への道を歩んでいったといつてよい。

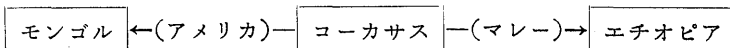
本稿のあつかうアメリカ人種学派 (以下アメリカ学派と略す) と称する一派はいわばこの草創期に属する人種研究のバイオニアたちであるが、ここでかれらについてとりわけ問題にするのはいわばその姿勢にみられる相反する水際立った特徴についてである。すなわちそのひとつはこの学派の研究態度が当時の思潮をそのまま反映して、終始、事実主義に棹さず堅実なものであったということ、つまりかれらは手で触れうる諸事実、直接観察されうる具体的な諸事実にたいしてのみ十全の信頼をおき、事実や感性から浮上った抽象、推理、仮説にたいしてはつねに

否定の眼をむけるという一種徹底した即物的な態度を持していたという点、そしていまひとつはこの学派のメンバーが当時、南部奴隷制の屈強の擁護論者（人種学を駆使して=黒奴隷制の科学的正当性を主張する一派）と目されていたことにも示されるように、かれらが決して特定のイデオロギーから自由、公正であったわけではなく、むしろ逆にその研究成果は当時の人種的偏見につよく染まり、その科学にせよおおむね奴隷制イデオロギーの具に墮せしめられていた観すらあるということ、この二点である。つまりそこには手堅い事実主義あるいは実証精神の標榜と、奴隷制イデオロギーを鼓吹する能弁なデマゴグとしての活動とがうらはらの形でむすびついていたわけであるが、こうした相矛盾する要素の並存はいったいなにに起因していたのであろうか。本稿では以下、このふたつの事柄の内的な連関について検討を加えることにしたい⁴。

—

アメリカ学派のおもなメンバーとしては、まずカレッジ・オブ・フィラデルフィアに解剖学の教鞭をとり、頭蓋骨の収集で一躍名声を馳せるにいたった S. G. モートン、氷河と化石魚にかんする研究ですでに確たる名をなし、ハーヴァード大学に職を奉じたスイス生れの学者 L. アガシのふたりを筆頭に、J. C. ノット、G. R. グリドン、ヴァン・エヴリらの名前をあげることができよう。これらのうちモートンとアガシとがいわば「独創的な思想家」としてこの学派の理論づけに貢献したとすれば、ノット、グリドン、ヴァン・エヴリらは「思想のセールスマン」として学説の紹介、普及に意を注いだといつてよい⁵。アメリカ学派の台頭は1840年代のことであるが、その人種論を知るにはまずかれらの負うていた旧世界の学問的遺産、とくに人種分類の方法と人祖をめぐる問題について触れておく必要がある。

二名式命名法の提唱者として知られるスウェーデンの学者カール・フォン・リンネは人種をはじめて体系的・科学的に分類した人物として知られるが、かれの主著『自然の体系』（1735年）はおもに皮膚の色を基準にとってホモ・サピエンス（この名称自体かれの命名になる）を四つに区分した。しかもそのさいかれは各々の人種にそれ固有の身体特徴を見出したのみならず、心的・精神的特質がその中に内在しているかのようによつて描いている。Homo Americanus. 肌が赤味をおび、胆汁質。頑固で現状に満足し、慣習に拘束される傾向あり。Homo Europaeus. いろ白く移り気で、多血質。碧眼で温和な性格。法の支配に服する傾向をもつ。Homo Asiaticus. 黄色の肌をし厳肅で威厳あり、かつ食欲。周囲の意見に左右されやすい。Homo Afer. 黒色の皮膚、粘液質で狡猾。怠惰で肉欲的で軽率。気まぐれに左右されやすい、云々⁶。こうした分類方法を継承・補足し、後世への影響力という点でより大きな力を揮うにいたったのは人類学の祖とされる J. F. ブルーメンバッハであろう。かれの『人類の自然変種について』（第二版1781年）は皮膚の色、頭骨の形状等を考慮に入れつつ、五つの人種区分法をうちだすものであったが、その命名になる各々の人種の名前と相互連関はつぎのように図示される。



つまり中心的位置を占めるのはヨーロッパのコーカサス人種であり、その優美な頭形と白色の肌ゆえに諸人種の祖型と目され、残余の人種はこれからの退化ないし墮落形態とみなされる。そしてこの退化の両極をなすのはモンゴルおよびエチオピア(=ニグロ)人種であり、これら両極へむかう過渡的形態として派生するのがアメリカ(=インディアン)およびマレー人種という構想である⁷。アメリカ学派の分類と命名はこれをそのまま踏襲するものであった。

18世紀の学者の関心をひいた今ひとつの論題は人祖をめぐるそれ、すなわち現今の諸人種が単一の同質な人祖に由来するのか、それとも複数の原初的に異質な人祖に由来するのかをめぐる論議である。そしてリンネ、ビュッフオン、カント、ブルーメンバッハ、キュヴィエといった当時の著名な学者たちはすべて単元論の陣営に与しており⁸、この立場はまたアダム、イヴを唯一の人祖とみなす聖書の教説とも合致していた。いっばんに単元論の立場が諸人種を同一の祖に淵源せしめるという点で人種平等と全人類の同胞視に通じるものを持っていた⁹とするならば、多元論の思想はそれが人種間の資質的な差異をもっぱら強調するところからして往々、人種優劣の思想へと傾きやすかった。すでにオランダのP.カムベル、イギリスのJ.ハンターといった解剖学者たちは顔面角と頭蓋容量の測定値のうちに、猿——ニグロ——白人と連なる「規則的な系列」(regular succession)ないし「序列」(gradation)つまり人種ヒエラルヒーの図式を見出していたが、この学統をつぐイギリスの外科医C.ホワイトはさらに軟骨、筋肉、腱、皮膚、頭髮、汗、体臭といった生理学上の諸点にいたるまで人種間の(とくに白人・ニグロ間の)生得的な異質性を見出し、そこから各々の人種はその誕生の初発からしてすでに異質な素地をふかく内在的に刻印されていたのであるとする多元論のテーゼを前面に押出すにいたった¹⁰。そしてアメリカ学派が受け継いだのもこの多元論の立場に他ならなかった。

いずれにしてもアメリカ学派はその出立にさいしてまずヨーロッパ学界の先達から一、二の基本的なフレームと論点を継承したわけであるが、この学派の特徴はこの派の中心人物であり、またもっとも手堅くかつ慎重な学究の徒でもあったS. G. モートンの研究態度のうちに出尽していると言ってよい。そのひとつは事実への旺盛な関心、広範囲にわたるデータ収集といった手法である。「人類の多様性にかんする寸言」(1842年)の中でモートンは述べている。「われわれの科学は本質的に言って事実にかんする科学(a science of facts)である。解剖学において明確な観察にゆだねることのできないような事柄が自明のものとされることはまずありえない。また生理学においてもわれわれは証示しうる諸事実の明白かつ合理的な帰結として導き出されるのではないような事柄に信をおく必要はない¹¹。」事実収集の面でモートンの名を著名ならしめたのは「アメリカのゴルゴタ」の異名をとった世界各地からの頭蓋骨のコレクションで、その収集数たるや最終的には数百類に及んだとされている¹²。しかもモートンはそのひとつひとつの容量を慎重な配慮のもとに測定し¹³、その成果を『クラニア・アメリカーナ』(1839年)、『クラニア・エギプティアカ』(1844年)¹⁴の二大著作として世に問うたが、この業績は過去に比をみない規模のデータ収集でもって人種間の差異を数量的に——つまり従来の「美学的な判断」にかえて「数学的な測定」でもって¹⁵——把握した画期的な労作であり、同時代人C. コールドウェルが惜しめない賛辞のもとに評したように、「ほとんどもっぱら龐大な

る一群の事実でもって」組み立てられた一金字塔であった¹⁶。モートンの計測によって得られた具体的な数値は次のとおりである¹⁷。

人種	頭蓋骨の数 (顆)	平均容量 (立方インチ)	最大値 (立方インチ)	最小値 (立方インチ)
コーカサス	52	87	109	75
モンゴル	10	83	93	69
マレー	18	81	89	64
アメリカ	147	80	100	60
エチオピア	29	78	94	65

モートンの人種研究はしかしデータの量的豊富さと実証精神の発露にもかかわらず、その研究成果についてみるかぎり、あまり斬新なものは含んでいなかったと言ってよい。たとえばかれの描く白人とニグロの特性は次のようなものである。

コーカサス人種

コーカサス人種はあらゆる色合いに敏感に染まりやすい自然ほんらいの白色を特徴としている。頭髪ははそく長くカールし、さまざまな色合いを呈している。頭骨はおおしく長円形で、その前方は隆起する。顔は頭の大きさに比して小さく長円形で、きわめて均整のとれた目鼻立ちをしている。鼻骨はアーチ形をえがき、顎は隆起し、歯は垂直にかみ合っている。この人種は最高度の知的能力に容易に到達するという点で水際立っている。

エチオピア人種

黒い皮膚と黒い羊毛状の頭髪によって特徴づけられる。眼は大きくかつ突出し、鼻は幅ひろく扁平、唇はぶ厚く口は大きい。頭は長頭で、前額部は低い。頬骨は出っばっており、顎は前方へとつき出し、顎さきは小さい。氣質的に言ってニグロは陽気で従順で怠惰である。この人種を構成する多数の部族のうちには知性のいちじるしい多様性がみられるが、その中でもとくに極端なものは人類の最下位のグレードを示している。¹⁸

以下このふたつの中間をなす他の人種の性格描写にかんする部分を抜粋すれば次のようになる。モンゴル人種、「その知的特性においてモンゴル人種は器用かつ模倣的で、教化されうる素地を大いに持ちあわせている。」マレー人種、「この人種は活動的かつ器用で、移動しつつ食物をあさる沿海種族のあらゆる習性をもっている。」アメリカ人種（インディアン）、「その精神的性格においてアメリカ人種は耕作を嫌い、知識を習得するのに緩慢である。落ち着きがなく絶えず動き回っており、報復的・好戦的で海洋上の冒険能力を完全に欠いている¹⁹。」——要するにこれはブルーメンバッハから受け継いだ人種区分の枠組のなかでリンネ流のスタイルに沿って身体・精神両特性をあわせ論じたものに他ならず、しかもその精神特性の具体的内容はいえ、モートンが生きたアンテ・ベラム期の巷間ひろく流布されていた俗流の人種イメージと偏見をそのまま投影したものであって、いずれにしても科学的記述とはおよそ縁遠いものと

いうほかない。

この人種論から奴隷制の擁護と賛美へはあと一步の距離にあるとって過言ではない。しかもアメリカ学派の人祖多元論のテーゼはこの傾向に拍車をかけるものとなった。モートンはある論考のなかで人祖の問題に触れてこう述べている。「わたしはかれら（諸人種のこと——筆者）がその起源からして、別言すればかれらが様々な地域に分散するに先立って、あのように相異なる精神的・身体的特徴——この相違あるによってかれらは地球上の様々なしかるべき地域へと初めて適応しえたのであるが——を賦与されていたのだと確信している。これらの多様性を考慮すればするだけ、それだけ一層わたしはこの多様性たるや決して本来同一であった体質が外的自然のはたらきかけの結果生じたものではなく、むしろ逆に人間のあいだには原初的な差異がすでに前以て存在していたのであるという結論に到達せざるをえない²⁰。」この文章はたんに人種間の生得的な差異を云々したものにすぎないが、かかる主張はやがてノットやヴァン・エヴリらの扇動家の手をへて大々的に価値づけされ、人種優劣の主張へとおし広げられて行くことになる²¹。そして優秀人種たる白人による劣等人種たるニグロの支配は、造物主の御手によって人間本性のうちに永遠に刻みこまれた掟にはかならぬとする生物学的な奴隷制擁護の論理がそこに誕生する。当時アメリカ学派が口にした常套的なレトリックのひとつは、たとえば次のようなものである。

八百万の白人と四百万のニグロとが、並存状態に置かれている。後者はその欲望、本能、能力、すなわち神から賦与された本性にふさわしく、家庭内での従属と社会的な順応の状態にある。かれらは異質の従属的な生き物であり、優秀人種にたいするその自然の関係にしたがって、異なった従属的な社会的地位に置かれている。それゆえかれらはノーマルな状態にある。このことは厳密には自明とは言えないにせよ、避けて通ることのできない真理であって、いかなる詭弁、自己欺瞞、権威ある格言あるいは誤れる推論といえど、一瞬たりとも否定しえない真理である。なぜならそれは造物主の御手によって永遠に定められた諸事実に依拠しているからである。ニグロは白人とは異質であり、劣っている。かれは異質の劣った立場に置かれており、それゆえ当然のことながらノーマルな状態に置かれているというべきである。この主張は一般的な命題として、疑いもなく真理にかなうものである。なぜなら疑いをいれる余地が毫も存しないのだから。すでに見たように神はかれを異質のものに、まったく異質のものに造り給うたのであった。その差異は全能の神のどの製作品にもまして不変のものである。神はそれゆえニグロを当然別個の目的へと——すなわち人種が並存状態にあるときにはいつでも、またそのような場所ではどこでも、異質の従属的な社会的地位へと——意図し給うたのであった²²。（傍点原文イタリック、以下同様）

その画期的ともいうべき事実主義の態度と実証的な手法がそのまま奴隷制擁護の論理へと横たわっていった原因はどこに求められるべきであろうか。これについて付言するならば、アメリカ学派のメンバーは必ずしも南部奴隷制と密接な利害関係におかれていたわけではなく、かれらの経歴にしても、まず最初奴隷制のイデオログたらんとする志が、しかるのちその理論的武装の方便として人種学に飛びついたというように一般化されるものでもない

いうことである。たしかにノットやヴァン・エヴリのような人物には多分に扇動的な色彩がみとめられるのであるが、本人の主観的意識に照らしてみるかぎり、かれらといえど偏見を事実選択の基準にし、実証と学問研究を奴隷制イデオロギーに従属せしめるようなことを意図していたわけではなかったのであって、むしろ逆にかれらもまた「諸事実をそれらの導くがままに——いかなる帰結が予想されようとも、そうしたことは顧慮することなく——たどって行く²³」態度をば科学研究の要諦としたのであった。より学究肌の人物、たとえばこの学派の領袖ともいうべきモートンについて言うならば、このフィラデルフィアの学究の徒にことさら南部の制度への愛着の念がつよかったという形跡は見当たらないし、かれの学問的名声はほんらい無脊椎動物の古生物学にかんする分野で樹立され、その学的関心も人種やエグロの劣等性とは直接関係のない薬学、地質学など広範な領域をおおうものであった²⁴。同様に1830—40年代にあい前後して合衆国に渡来したイギリス人グリドンやスイス人アガンの場合にも当然のことながら奴隷制を正当化しなくてはならないような個人的事情に置かれていたとはいえず、いずれにせよアメリカ学派の科学的な限界はこれを一律に個人的、主観的な側面にのみ求めることには無理があるといつてよい。したがって次節ではそうした個々人の動機や事情を超えたこの期の人種学の方法というやや別個の分野へと焦点をあわせて、そこに原因を尋ねることにはしたい。

二

アンテ・ベラムは一般にロマンティズムの時代として、その啓蒙主義にたいする反動性が強調されている。つまりそれは論理、理性、意志よりも感情と想像力を尊重し、主観的・内面的な感情のほとばしりを謳歌した時代であるとされている。しかしこの時代はまた他面では自然科学の興隆期にもあたっているのであって、当時科学者たちのあいだで模範と仰がれたのは史家 A. コイレ、H. バターフィールド等の研究いらい注目を浴びるにいたったあの16、17世紀の「科学革命」の担い手たち、なかでも経験論、帰納法にその名がむすびつけて記憶されている F. ベーコンの方法態度であった。「こんにち周知のようにベーコンの哲学が真の哲学の同義語となっている」(E. エヴレット)といわれたように、実験と観察を第一義とし、自然科学をエムピリカルな基礎のうえに据えようとする気運が当時盛りあがりをもよおしたと云ってよい²⁵。そのアフォリズムのなかでベーコンはアリストテレスに言及して、この古代の哲人は一般命題を構成するにあたって経験に相談するのではなく、自分で勝手に決定したのち経験を思いのままに歪め、虜囚のように引き回したに過ぎないと述べ²⁶、あるいはまた例の「劇場のイドラ」(Idols of the Theatre)という表現でもって、「これまで受容されてきた哲学上の諸説はたんにそれと同数の、架空のかつ舞台向けに作りあげられた世界を表わす芝居 (stage-plays) にすぎない²⁷」として、過激かつ挑発的な筆鋒でもって従来²⁸の形而上学的思考を一蹴したのであった。アンテ・ベラム期の科学者たちが目指したのもこの経験主義的な直接事実につこうとする態度であったと云ってよく、かれらは科学の全部門をおおうかつてのエンサイクロペディックな傾向を捨てて次第に一、二の特定分野へと関心を絞り、また他方では身边に広範なネットワークをめぐらして意欲的な事実収集へと乗り出していった²⁸。

科学界のこうした趨勢と研究者世代の交替は、当時フィラデルフィアの自然科学アカデミーの会長をつとめていた W. マクラーがアメリカ学派の指導者モートン宛てに送ったつぎの書簡のうちに示されている。「小生ははや老境にさしかかり、身体の不ふしぶしも以前ほど柔軟ではなくなってまいりました。身体を動かすことにはおおむね興味も失いましたし、博物学の実践的な追求はもう若い世代に委ねる必要があると考える次第です。あらゆる厳密科学の知識の分野における進歩は現在と往時とを比較するとき、じつに一驚に値するものがあります。…(中略)……その進歩たるや三十年間に幾何級数的なものを示しており、どれほど熱意ある予測者といえど学芸と科学の行く末を、人類のためのその他諸般の改善および趨勢を占うことはできないような有様です²⁹。」この時期のアメリカはしかし、科学の行く手にならずしも平坦な道程のみを準備していたわけではなかった。1820—30年代にかけて争われたカレッジ・オブ・サウスカロライナのクーパー事件や、1850年代のコロンビア大学で起ったギブス事件に見られるように、当時はまた学長が理神論者であるということが物議をかもし種となったり、一化学者がユニテリアンという宗教的信条のゆえに教職につくことを得なかつたりしたような時代でもあって、信教や学問の自由の思想はいまだじゅうぶん確立されていたとはいいがたいからである³⁰。

こうした風潮のなかにあつてアメリカ学派がまず取り組んだのはほかでもない科学と宗教の峻別、つまり科学研究を宗教的ドグマへの依存と拘束から解放して、その自立化をはかる作業にほかならなかつた。アメリカ学派の掲げる人祖多元論のテーゼを地動説、血液循環、地理上の発見とおなじく誤れる神学にたいする科学の勝利、「科学とドグマティズムとのあいだの最後の大決戦³¹」とみなしていた論客ノットは、『人類の聖書的ならびに自然科学的歴史の連関にかんする二つの講演』(1849年)のなかでつぎのように述べている。「この書物におけるわたしの主目的は人類の博物学を聖書から解きはなち、これらおのおのを衝突や妨害の生じぬよう、それ自身の地盤のうえに据えることである³²。」聖書にみる「神の啓示を受けた記述者たちの使命はたんに道徳的なものであるに過ぎず、その啓示は科学の領域までも覆うものではなかつた³³」云々。要するにこれは「道徳界の法則」(*moral laws*)と「自然界の法則」(*physical laws*)³⁴とを、あるいはゾルレンの領域とザインの領域とを截然と二分し、聖書の字句の妥当範囲をもっぱら前者の局面にのみ限定せよという要請にほかならず、この派のメンバーの掲げた事実主義的な方法もこの要請に立脚してのものであつた。かれらの叙述スタイルを特徴づけるのは *facts* をしばしばイタリック体で強調裡にするすというものであつたし、また一般にアメリカ学派が科学上の論戦で相手がわを揶揄、誹謗するばあいの特徴はといえば、いっぽうで論敵の提示してくる諸事例に「想定上の」(“supposed”) といった形容詞を冠しつつ、その事実の確実性に疑問符を付し³⁵、他方ではみずからの列挙する諸事例には「自明で現実に存在し、つね日ごろ触知しうる無視すべからざる自然科学的事実」(“a self-evident, actually existing, every-day palpable and unavoidable physical fact”)³⁶、あるいは「触知しうる直接的な、証示可能で避けて通ることのできない事実」(“a palpable, immediate, demonstrable and unescapable fact”)³⁷ といった調子で、およそ煩瑣なまでの修飾語を付しつつ、その自明性と確実性を強調する手法であつた。

この「触知しうる」事実へのつよい固執感をもたらした一つの重要な帰結は、それが抽象的な思考や概念にたいする徹底したアンティパシーの念を生みおとし、「反理論的^{アンティ・セオレティカル}」であることをもって即科学的とみなすような雰囲気をつつたということであろう³⁸。科学上の誤謬は事実観察の次元で生じるものではなく、もっぱら諸事実——すなわち「疑うべからざる諸事実」(the never-to-be-doubted facts)——からの性急な推論の過程においてであるという信念³⁹、あるいは感覚所与 (sense data) にあくまでつこうとする即物的な姿勢が、事実から浮きあがった推理、抽象、仮説への生理的な嫌悪感をうながしたと言ってよい。モートンはみずからの科学が「事実の科学」(“a science of facts”)⁴⁰たることを力説したのであったし、ノットもまた「われわれはさまざまなテキストを切り張りしつつ、われわれ独自の理論を立てようとしたのではなく、逆に諸事実をそのままの偽らざる形で提示しようとしたに過ぎない」として理論考察への蔑視を表明し、「一群の諸事実」(“a mass of facts”)と「事実の集積」(“the accumulation of facts”)を第一義としたのであった⁴¹。同様にヴァン・エヴリもまたその一般向けの啓蒙書のなかで予定説や原罪といった神学上の観念や「国王の『神聖性』、僧侶の『無誤謬性』、その他いつわり満ちた抽象物」を頭から否定し、それらは「自然科学的な証明や具体的な事実にてらしては吟味しえない」代物であるとして斥けた⁴²。しかもかれは「自然科学的な諸事実」(“physical facts”)と「抽象的性質のことがら」(“things of an abstract nature”)とを一般的に対置したうえで、後者の抽象物をそのまま科学性の欠如として否定し去った⁴³のであって、その視界からは抽象、理論とともに思考するという姿勢自体までもが見失われてしまった観がある。ドイツの社会主義者 F. エンゲルスは19世紀イギリスに蔓延した F. ベーコンの亜流に言及したさい、その特徴を叙して「たんなる経験をのみ頼み、思考を絶対的な軽蔑をもってあつかい、そして実際に無思想という点ではこれまた最大限にまで達してしまっている⁴⁴」一派としてきわめて手厳しい評価を下したのであったが、せまい経験と即物的な感性への固執が理論蔑視と無思想をもたらすというこの亜流ベーコン主義にかんする評言は、そのままアメリカ学派の欠陥の核心を衝いた言葉でもあったと言っていい。

事実と感性の尊重がかならずしも抽象や思考の排斥を意味するものではないということは、F. ベーコンの本来の所説に照らして明らかであろう。ベーコンは「素朴な感覚的知覚からまず出発」し、漸次、抽象度をたかめて確実性の段階に種々相を設けることを説いた⁴⁵のではあったが、決して感性的次元にのみ固執すべきことを強いてはいない。むしろかれは「人間の知性のこの上もない最大の障害と錯誤とは、感覚の鈍さと無能と虚偽とから生じ、その結果感覚を打つものは、たとえ有力ではあっても感覚を直接動かさないものに比べて、より重きをなすようになる。それゆえに、思察は視覚[が止む]とともに停止し、その結果、眼に見えないものについては、ほんのわずかし考察されないか、あるいは全くされないようになる⁴⁶。」として事実主義と実感信仰に警告を発し、そのエピゴーネンがエンゲルスから蒙った批判をむしろみずから先取りして口にしたのであった。つぎに引くベーコンの「アフォリズム」⁹⁵はアメリカ学派の立場を定式化するうえで、格好のかつ興味ぶかい文章となっている。

学をあつかってきた人びとは、経験派の人か合理派の人かのいずれかであった。経験派は蟻の流儀でただ集めては使用する。合理派は蜘蛛のやり方で、自らのうちから出して網を作る。しかるに蜜蜂のやり方は中間で、庭や野の花から材料を吸いあつめるが、それを自分の力で変形し消化する。哲学の真の仕事も、これと違っているわけではない。それはすなわち精神の力だけにとか、主としてそれに基づくものでもなく、また自然誌および機械的実験から提供された材料を、そのまま記憶のうちに貯えるのもなく、変えられ加工されたものを、知性のうちに貯えるのである。それゆえにこれら（すなわち経験的と理性的の）能力の、密で揺ぎない結合（いまだ今までに作られていないような）から、明るい希望が持たるべきなのである⁴⁷。

要するにベーコンはここで健全な学問研究というのは蟻のように主観を押殺してもっぱらデータ収集のみ埋没する素朴な事実主義の方法にあるのもなければ、その逆に蜘蛛のように対象的・客体的な諸事実を目をおおって、自己の主観的頭脳から観念的・形而上学的な論理の糸をつむぎ出すのもなく、むしろこれら両者の中間をいく蜜蜂の流儀によらねばならないということを力説したわけであるが、この把握に照らしていうならば、アメリカ学派は神学的な蜘蛛の流儀を攻撃するに急なるあまり、その反動として対極的な蟻の流儀に飛びついたと言ってくよく、出発点からしてすでにベーコン本来の意図と方法におおきく背いていたと言わねばならない。

この悪しきベーコン主義ともいうべき事実主義の方法は、エンゲルスのいうその最大限にまで達してしまった無思考性のゆえに、アメリカ学派の主張と立場にきわめて逆説的な性格を賦与することになった。というのはアメリカ学派のメンバーはみずからの依拠する学問的フレームの妥当性に対してじゅうぶんな原理的反省を加える作業までをもなおざりにし、その結果、自己の系譜に流れる蜘蛛の流儀にはかえってこれに無自覚的になったふしがあるからである。モートンやノットは人種分類の方法とヒエラルヒックなその配列の図式をブルーメンバハ等から受け継いだのであったが、かれらはこの先学の手になる必らずしも先験的・思弁的性格を脱していない枠組を確たる自覚もなしに自明視ないし絶対視し、もっぱらその所与の枠組のなかに事実を投じる作業のほうに専念した趣がある。しかしリンネ、ブルーメンバハ当時の草創期人類学はその立論のうちになおさまざまな前近代的観念を含んでいたものであり、多分にまたアプリオリな諸前提を土台としてもっていたのであった。たとえばリンネが人種の性格づけに用いた「胆汁質」「多血質」といった用語は言うまでもなくガレーノスに始まり中世を通じて祖述、普及せしめられた古風な概念であったし、ブルーメンバハの名づけたコーカサス人種の呼び名にしても、本来『旧約聖書』の出来事にそのまま信をおいたところ由来していた⁴⁸。またカムペル、ハンター、ホワイトらの解剖学者たちが白人——ニグロ——猿——犬とつらなる顔面角の推移をその生物の知的優劣にからめて論じたさい、そこで暗黙の根拠ないし前提とされていたのは例の「偉大な存在の鎖」という時代があった観念にほかならなかった⁴⁹。多元論者は聖書の单元論に異を立てて人種差と資質的優劣の原初性を唱えたのであったが、この異論にしてもじつは天地創造の日時をノアの洪水やモーセの戒律等から測定して B.C.

4004年10月26日(水)に定めるかのアッシャーの算定をふまえた上でのものであり、聖書年代学じたいを否定するものではなかった⁵⁰。原理的思考にあまりおもきを置かなかったアメリカ学派はその学問上の労力を、こうした自らの系譜にながれる観念的残滓の排除にむけることはなかったと言ってよい。

アメリカ学派が無批判的に浸っていたアプリオリな観念のなかでもっとも中心的なものを一つ挙げるとすれば、それは身体特徴と精神傾向とを直結ないし対応せしめるという思考方法であろう。この学派の著作には「メンタル・アンド・フィジカル」、あるいは「ニグロの身体的なそれゆえ精神的な特徴」といった語法でもって、この両者^{モラル・コントラスト}を無雑作に並置あるいは規定関係において捉える思考が頻出する^{フィジカル・ダイヴァーゼンティズ}。『旧約聖書』創世記9・25—27に言及したつぎのモートンの言葉は、「道徳的な差異」と「身体上の相違」とが密接な対応関係をもつという自明の前提を抜きにしては意味をなしえないものとなっている。すなわち「このうえなく著しい道徳的な差異は箱舟に由来する人類の子孫以来のものである。だからわれわれはこれと同じくらい著しい身体上の相違もすでにその当時から存在していたのであり、今日の言葉でいう人種なるものもすでに出来あがっていたのだと推定してもよいであろう⁵²。」精神と身体に関するこのなんらの妥当性も保証されてない命題もノットやヴァン・エヴリらの手にかかると、むしろ自明の公理として断定的な語調でくりかえされるにいたる。「人間の知性はその身体的な外形と不可分である。前者の特質の変化は、後者のがわのそれ相応の変化なしには生じえない⁵³。」「モンゴル、マレー、インディアン等の中間段階(白人とニグロとのあいだの——筆者)に位置する人種は、その身体上の型に相応した^{フィジカル・タイプ}半文明^{セミ・ソヴァリゼーション}の状態に到達している⁵⁴。」「外形的な諸特徴が基本粒子の最小の原子にいたるまで内部組織と精密に調和しあっているということがらには不変不滅の永遠の法則であり、また生物の組織体^{その機能や本能つまり本性と調和ある対応関係にあるということもまた等しく不変かつ永遠の法則であるがゆえに}、われわれは絶対的な確信をもって種特有の性質を理解しうるのであり、白人種と黒人種をわかつ相対的差異や実際上の相違といったものをも、かなりの程度の確信をもってとりあげることができるのである⁵⁵。」「ニグロの知能と本能にみられる白人とのあいだの差異は、身体的な特質における相違の面から精密に測定しうる⁵⁶。」「林檎、梨、桃等はそれじたいの独自の外形的特徴をもち、かつその外形に対応する性質を内容的にそなえている。」梨や桃の性質をそなえた林檎というものを、ひとはいったい想定しうるのであろうか⁵⁷。こうした安易なアナロジーはアメリカ学派の著作をいろいろ常套句の一つをなすものであり、この学派が骨相学によせた関心もここに由来していたと言ってよい⁵⁸。

このように外形的・量的なものをそのまま質的・精神的なものに関連づける思考法はただたんにそこにとどまらず、アメリカ学派が実際に陥ったように、今度はそれが価値づけを施されることによって身体的外形(顔面角、頭形、頭蓋容量)から精神的営為の質的優劣・高低を判定しうるとする主張へと発展していく。しかもアメリカ学派にとって白人文明の卓越性、その知的・精神的優秀性はうたがいのない事実であり、この人種の身体特徴は——それ自体はほんらいなんの価値も帯びていないにもかかわらず——この内面的優位をうつす外的徴表として同時にまた最高の価値づけをあたえられることになる。そしてニグロやモンゴルなど他の人種の身

体特徴はこの白人の徴表を基準に、それへの近接の度合いにそくしてランクづけされるわけであり、いずれにしてもここでは精神・身体両面の価値はさいしょから白人の独占するところとなっている。この暗黙の前提のあるところ、白人優位の人種偏見が克服されることはありえない。つぎの言葉はアジアの卓越した指導者にかんするヴァン・エヴリのものであるが、これは要するに偉大な知性やリーダーシップなど秀でた部分、プラスの価値を持つと思われるものはすべてこれを白人のがわに吸収せんとするきわめて恣意的な意思を示すものであり、またアメリカ学派の論理がいかにかつ無原則なかたちで白人優越主義に帰着していくかの極端な事例となっている。「こんにち中国にその名を伝えられている孔子およびその他著名な人々は多分白人であった。」「アッティラは生粋の白人の血を引いており、その指揮官たちもまた明らかに白人あるいは白人の気質の優勢な人々であった。しかしながらかれの恐るべき軍団の大部分を構成したのがモンゴル人種であったということは、これまた等しく確実である。」「ジンギスカンは白人の血が優勢ではあったが、かれはモンゴル系との混血であった。しかしそのご数世紀にわたって現われたかれらの後継者たちは主として白人あるいは白人の母親をもつ子孫であった。最後にこれら恐るべき征服者たちの最後にして最大の人物たるチムール」もまた「生粋の白人の血をひくものであり、その將軍・指揮官もまた疑いもなくそうであった。」しかし「チムール麾下のこれらほとんど無数ともいうべき軍団の大部分は純然たるモンゴル人種であった。したがって指導者自身は白人であったのだが、その征服事業の血なまぐさい破壊的な性格はあの人種の残忍さと擻猛さによって刻印されたのである⁵⁹。」

モートンによって先鞭をつけられた人種差を数量化しようとする試みはまもなく人体測定学という新たな学問分野の誕生をうながし、やがてこの人体測定の領域が19世紀人類学の精華として脚光を浴びるにいたる⁶⁰。アメリカ学派の方法を敷衍するかぎり、この趨勢はけだし必然であったと言ってよい。ほんらい人体測定学とは人類学の一補助手段として発足したものが肥大化、独立した分野であって、そこでは人種区分や人種差把握のころみになにか本質的な意義があるのかどうかといった原理的、懐疑的な問いかけは最初から埒外に置かれており、ただその関心はもっぱら精巧な器具による身体特徴の把握へとむけられている。研究関心のこうした純技術的次元への収斂は裏からいえば、この作業を根底から支える特定のイデオロギーなり価値観（白人優位的なそれ）なりが完全に自明視され、ひとつの公分母として研究と論議の土台に定着してしまったことを意味している。したがってそのような雰囲気の下ではたとえ丹念な事実収集がなされようとも、手持ちの図式にあわない「御し難い」諸事実が出てくればプロクルステスのベッド流に切り捨てられ、アプリオリなフレームの妥当性は依然疑われるということがない⁶¹。南北戦争は人体測定学の発展における一画期をなすといわれるが、この戦争はただたんに人類学という学問の技術化と人種的偏見の固定化にさらなる拍車をかけたに過ぎなかった。戦時中 United States Sanitary Commission および Provost Marshal-General's Bureau というふたつの公の機関が設置されて、徴集された兵士を中心にニグロ、インディアン、ムラトターなどを——それまでのように一握りの事例を不統一な器具でもって散発的に調査するというのではなく——連邦的な規模でかつ規格化された測定器に訴えて、ニグロ徴兵の

可否、ムラットの身体的脆弱性、アイルランド系・ドイツ系など白人内での相違如何といったさまざまな観点に照らしつつ計測がおし進められたのであったが、その歴大かつ未曾有のデータから引き出された数値と結論もモートンの著作を越えるようなものはほとんど含んではいなかった⁶²。

おわりに

アンテ・ベラムの時期は詩人 W. ホイットマンが「実証科学(positive science)ばんざい！ 厳密なる論証に永遠に幸あれ！⁶³」と謳ったように、ロマンティズムの精神とともに実証精神の風靡した一時期であった。科学がベーコンの名のもとにそれまでの抽象的な机上論から経験主義、事実重視の方向に転換をとげていったさなか、アメリカ学派がまず打ち出したのは存在と当為の区別であり、感性的分野にのみ確実な知識を容認しようとする態度であった。しかしアメリカ学派が「厳密科学」(exact science)「近代科学⁶⁴」として誇ったその科学も、一步立ち入ってみるならば、じつは過去の学的遺産と時代の偏見とを無批判的に受容した奴隷制イデオロギー正当化の論理たる性格を脱するものではなかった。こうした帰結をもたらした第一義的な原因は、この学派のメンバーが時流に阿諛して意図的な曲学に走ったという事柄よりも、まづもってかれらのたずさわっていた科学の方法それ自体のうちに見出されるべきであろう。アメリカ学派は「聖書批評」(biblical criticism)を口にし⁶⁵、神学的な抽象概念をつよく斥けたのであったが、この反動として身につけたベーコンのいわゆる蟻の流儀の方法ゆえにかれらは思惟による抽象的構成物を否定し、思考そのものを軽んじ、ひいては自分自身の立場や観念を対象化するという姿勢あるいはそれに原理的な疑問を投げかけるという姿勢そのものを見失うにいたった。モートンやノットらはいっぽうでは「われわれはいかに博識で尊敬さるべき著述家といえど、かれらからの引用でもってページを満たすようなことはしない⁶⁶」と宣言し、「多くのひとびとは机上の空論に満足し、根拠のない憶説を証拠だてるべく事実を曲げる⁶⁷」の愚を犯していると言いつつも、かれらの事実主義じたいその時代の支配通念に追随し、そこに価値基準を仰ぐという性格が出るものではなかった。当時アメリカ学派を取巻く状況は「事実の洪水⁶⁸」ともよびうる氾濫状況を呈したのであったが、その洪水もじつは俗流の偏見に染まった古い既成の鋳型の中へと流しこまれたにすぎなかった。ベーコンはその著書をアリストテレスの *Organon* にちなんで *Novum Organum* (New Organ) と名づけ、「大革新」のタイトル・ページにヘラクレスの柱を突破して帆走する満帆の船の図版を掲げたのであったが、かれにかぎらず一般に科学革命の担い手たちには旧来の方法と視座に取って代ろうとするパイオニア特有の自覚的な方法意識があったとってよい。もし科学上の革命をもたらすのが新事実の発見・観察や素材の多寡といったものではなく、むしろ往々にして科学者じしんの精神内部における意識変化であるとするならば、あるいはあらゆる精神活動の中でもっとも困難なのが、「従来とおなじ一連のデータを用いながら、しかもそれに別の枠組を当てはめて相互の関係を新しい体系に組みかえること」であるとするならば⁶⁹、アメリカ学派にもっとも欠けていたのも他ならぬこの意識変革であり、思考の柔軟さであったとってよい。

註

1. ユニテリアン派の牧師 W. E. チャニングは1829年『クリスチャン・エグザミネー』誌で、「じつにわれわれの時代の最も注目すべき事態ないし特徴のひとつは、結合、すなわち協力と人員の連合による行動の原理からおのずと現れる精力である。いまや万事が『団体』によって行なわれているといっても過言ではない」と述べて、アソシエーションの原理がこの期の人びとの心をつよくとらえた事態を指摘している。Russel Blaine Nye, *This Almost Chosen People: Essays in The History of American Ideas*. (Michigan State University Press, 1966). 原島善衛訳『アメリカの知性——アメリカの理念の歴史的考察——』（北星堂書店）、21-22頁。
2. R.B. Nye, *Society and Culture in America 1830-1860*. (Harper & Row, Publishers. New York, 1974), pp. 239-240 ; Nathan Reingold, ed., *Science in Nineteenth-Century America. A Documentary History*. (London, 1966), p. 200.
 アメリカ学派の指導者 S. G. モートンは考古学的遺物の保存について、ある論考のなかで次のように述懐している。すなわちそれらはこれまで無価値なものとして捨て置かれるか、あるいはたんなる好奇心の対象でしかなかったが、その形状、特質などを学術誌に記録していくことによって、初めてわれわれは「蓄積された事実群」を確保しうるのであり、そこからまた重要な一般化をも引き出しうるのである。『アメリカン・ジャーナル・オブ・サイエンス』などはまさに「そうした観察の多い貯蔵庫」ともいうべきものである、と。Samuel George Morton, *Some Observations on the Ethnography and Archaeology of the American Aborigines*. (New Haven, 1846), p. 4.
3. Harry Hayden Clark, "Emerson and Science," *Philological Quarterly* (Volume X. July, 1931 Number 3), p. 225, pp. 229-234.
4. この場合アメリカ学派の研究者にまず最初、奴隷制擁護の動機なり、根強い人種の偏見なりがあって、もっぱらこれを正当化せんがために諸事実を漁ったというのなら問題は簡単であり、あらためて原因を指摘する必要などない。ここでは後に見るように、個々人の主観的な意図なり意識なりがどうであったかということよりも、むしろそうした個々の動機を超えたかれらの科学の方法論それ自体のうちにこの原因を尋ねることになる。
5. H. Shelton Smith, *In His Image, But Racism in Southern Religion, 1780-1910* (Duke University Press, Durham, N. C., 1972), p. 155.
6. John S. Haller, Jr., *Outcasts from Evolution: Scientific Attitudes of Racial Inferiority, 1859-1900* (University of Illinois Press, 1971), p. 4.
7. ブルーメンバッハはコーカサス人種がなぜオリジナル・レイスとみなさるべきかの理由を次のように説明している。「なぜならまず第一にこの人種はすでに見たように、もっとも優美な頭骨の形状を呈しているからであり、他の人種はごく自然なかたちであたかも中心的な祖型から分岐がなされるかのごとく、ここからふたつの側へと両極端に分れていくのである。(つまり一方の極にモンゴル人種、他方の極にエチオピア人種、と。) これに加えてこの人種の色の白さが挙げられよう。白色こそは人類の原初的な肌色であったとみなしてよい。というのも、先に見たように、白色は容易に褐色へと変化をきたすが、炭素質の色素の分泌物がひとたびふかく沈着してのちは、かかる暗色が白色に変わることはけだし困難だからである。」Quoted in *ibid.*, p. 5.
8. John C. Greene, "Some Early Speculations on the Origin of Human Races," *American Anthropologist*, LVI (1954), p. 32.
9. たとえば「ガラテヤ人への手紙」3-28の「もはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由人もなく、男も女もない。あなたがたは皆、キリスト・イエスにあって一つだからである。」という言葉がそうである。あるいは「使徒行伝」17.25-26を参照。
10. ホワイトの書名 *An Account of the Regular Gradation in Man and in Different Animals and Vegetables; and from the Former to the Latter* (London, 1799) は、

かれがこうした「序列」を人間、動物、植物界にまで敷衍させて考えていたことを示している。Winthrop D. Jordan, "Introduction," in Samuel Stanhope Smith, *An Essay on the Causes of the Variety of Complexion and Figure in the Human Species*, ed. W. D. Jordan (Cambridge, Mass., 1965), pp. xxxiv-xxxvi ; John C. Greene, "The American Debate on the Negro's Place in Nature, 1780-1815," *Journal of the History of Ideas*, XV (June, 1954), p. 390.

なおつぎのホワイトの言葉は、この多元論的な資質差の観念を前提に語られた白人賛歌のはしりであるといつてよい。「あの変化に富んだ顔かたちと表情の豊かさ、あの長い流れるような優雅な巻き毛、威厳のある顎鬚、バラ色の頬と珊瑚色のくちびる。これらはいったい(ヨーロッパ以外の——筆者)どこに見出されるであろうか。しとやかさ、繊細な感情、そして思慮分別の象徴ともいふべきあの美しいヨーロッパ婦人の温和な顔にひろがる紅潮をひとはいったい地球上のどこに見出すことができるであろうか。」Quoted in J. C. Greene, "The American Debate on the Negro's Place in Nature, 1780-1815," p. 391.

なおこの言葉は『ヴァージニア覚え書』にみられるT. ジェファソンの言葉をそのまま想起させるという点で興味をひく。すなわち、「黒人の表情を支配しているあの永遠の単調さ、あらゆる感情を蔽いかくしているあの黒い不動のヴェールよりも、白人のように赤と白がみごとに混りあい、皮膚の色にさす紅潮の程度によってあらゆる感情が表現される方が、より一層好ましくはないだろうか。さらに加えて、流れるような髪の毛や、より優美な身体の均整。またオランウータンが自分自身の種族のメスよりも黒人の女性の方を好むのとまったく同様に黒人が白人をより好むことからわかるとおり、黒人自身も白人の方が美しいと判断していること。われわれが、馬や犬その他の家畜をふやすときに、より美しいものをと心がけることは大切なことであると考えられている。それならば、なぜ人間の場合に、そうであってはいけなのだろうか。」(Thomas Jefferson, *Notes on Virginia* [1782]. 中屋健一訳『ヴァージニア覚え書』[岩波文庫], 250頁。)ジェファソン自身は多元論のテーゼについてはこれを正面切って打出しているわけではないが、上の白人賛歌についていうかぎり、ジェファソンのほうが英人ホワイトに影響を与えたとみてよさそうだ。W. D. Jordan, *op. cit.*, p. xxxvi.

11. Gilbert Osofsky, ed., *The Burden of Race. A Documentary History of Negro-White Relations in America* (Harper & Row, Publishers. New York, 1967), p. 110.
12. 頭蓋骨収集にさいしてとくに役立ったのは、モートンが1831年にフィラデルフィア自然科学アカデミーの通信係書記のポストに選出されたことである。以後かれはこの職務を利用してひろく外国の博物学者、地質学者とも交流する機会に恵まれた。その収集数についていえば、史家ラリーは1839年にモートンがほぼ900顆を収集していたと推定している。そしてこれに註を付して、1846年にモートンの同僚アガンが600顆と見積っていたことに触れている。しかし史家スタントンの著作によれば、『クラニーア・アメリカーナ』(1839年)の段階で256顆とのみ記されており、ラリーの数字とのあいだにはかなりのひらきがある。Edward Lurie, "Louis Agassiz and the Races of Man," *Isis*, XLV (1954), pp. 229-230 ; William Stanton, *The Leopard's Spots : Scientific Attitudes toward Race in America 1815-59* (The University of Chicago Press, 1960), pp. 27-28, p. 32.
13. モートンは頭蓋容量の測定にさいして最初、白胡椒の種子をもちい、ついでより正確を期するため粒の揃った鉛の小弾丸に切りかえるなど、些細な点にいたるまで様々な工夫と創意をこらしている。こうした点については上掲の W. Stanton, *The Leopard's Spots* の "White Pepper Seed" の章に詳しい。
14. 詳しい名称はつぎのとおり。 *Crania Americana ; or a comparative view of the skulls of various aboriginal nations of North and South America : to which is prefixed an Essay on the Varieties of the Human Species* (Philadelphia, 1839) ; *Crania Aegyptiaca ; or Observations on Egyptian Ethnography—Derived from Anatomy*,

History, and the Monuments (Philadelphia, 1844).

15. W. Stanton, *op. cit.*, p. 33. 同様に史家 G.M. フレドリックソンも『クラリーニア・アメリカーナ』を評して、「冷静な経験主義の時代を拓くことによって、人種の起源と差異にかんするルーズな思弁に終止符を打つ」ものであったと述べている。モートンの功績に関するこうした評価は定着しているといつてよい。George M. Fredrickson, *The Black Image in the White Mind : The Debate on Afro-American Character and Destiny, 1817-1914* (Harper & Row, Publishers. New York, 1971), p. 74.
16. コールドウェルは『クラリーニア・アメリカーナ』が「自画自賛的な理論、なにかんずく鉄のようなドグマと空疎な仮説」から自由であり、またそれが「粗雑な見解」や「未熟ですぐに崩れ去ってしまいそうな体系」を掲げるかわりに、一群のマッシューヴな諸事実を提示してみせた点を絶賛したわけである。Quoted in W. Stanton, *op. cit.*, p. 39.
17. *Ibid.*, p. 32. Table 1. (*Crania Americana*, p. 290 より作成)。
18. Louis Ruchames, ed., *Racial Thought in America. Volume I From the Puritans to Abraham Lincoln. A Documentary History* (The University of Massachusetts Press, 1969), p. 445, p. 447.
19. *Ibid.*, p. 446.
20. G. Osofsky, ed., *op. cit.*, p. 110.

アメリカの単元論者として古典的な位置を占めるのはサミュエル・スタンホープ・スミスであるが、かれはおもに人種の皮膚の色とそれにおよぼす気候の影響という点に焦点をあわせて所論を展開していた。これにたいして多元論者は人間の骨格などを問題とする解剖学畑の学者のあいだに多く輩出した。単元論にたいするモートンの疑問は要するに、気候が皮膚の色に影響をおよぼすというのはわかるが、気候が骨格の構造や頭骨の形状にまで影響をおよぼすというのは到底考えられないことだという点にある。ここからモートンは皮膚の色にかえてむしろ“the permanence of those organic characters”あるいは“these diversities of organization”といったように、“organization”という側面を前面へとおし出し、その形態上の差異は気候のような「外的諸原因からは独立して」(“independent of external causes”) いるという点を強調するにいたる。拙稿「サミュエル・スタンホープ・スミス——『試論』にみられる人種観について——」神戸女学院大学『論集』第25巻第1号(1978年7月)。W. Stanton *op. cit.*, pp. 31-33; G. Osofsky, ed., *op. cit.*, p. 113.

21. ノットらに比べるとモートンはきわめて慎重な人物であり、扇動的な言辭を弄するようなタイプではなかったが、この傾向はしかしすでにモートン自身のうちに現われているとみることができる。たとえばかれは1840年の解剖学の講義で人間間の頭蓋容量の落差と白人の疑う余地のない優秀性にふれ、「アジア、アフリカ、アメリカ、そして熱帯および寒帯で、他のすべての人種はこの人種に屈服し道をゆずってきたのではなかったか」というアグレッシブな発言を口にしている。W. Stanton, *op. cit.*, p. 41.
22. John H. Van Evrie, *White Supremacy and Negro Subordination ; or, Negroes a Subordinate Race and (so-called) Slavery Its Normal Condition* (Originally published in 1868 by Van Evrie, Horton & Co. Reprinted 1969 by Negro Universities Press, New York), p. 188.

このアメリカ学派の奴隷制擁護論について詳しくは拙稿「アメリカ人種学派の奴隷制擁護論」神戸女学院大学『論集』第27巻第3号(1981年3月)を参照されたい。

23. Eric L. McKittrick, ed., *Slavery Defended : the views of the Old South* (Prentice-Hall, Inc. Englewood Cliffs New Jersey, 1963), p. 137.
24. もともとモートンはフィラデルフィアの大学で教鞭をとっていた北部人であり、この点チャールズタウン(ボストン)、ハーヴァード大学の教授をつとめたスイス生れのアガンと同様、奴隷制との経済的な結びつきはもっていない。もっともモートンがそれまで地質学、古生物学、解剖学、生理学等の諸分野に分散させていた科学的関心を、1845年頃から次第に人種学

- へと絞っていったことは事実である。また同僚のノートも証言しているように、1844年英・仏両国が合衆国によるテキサス併合とこの地域への奴隷制導入に反対の意向を表明してきたさい、モートンとグリドンはこの干渉を反駁すべく苦慮していた国務長官カルフーンの要望にこたえて快く助言を呈し、モートンは『クラニア・アメリカーナ』、『クラニア・エギプティアカ』——この後者は奴隷制がエジプトの社会制度の最初期の段階においてすでに存在し、往時も今もニグロの社会的地位は同じであることを論証したものであった——の二著をカルフーンに献呈するなど協力を惜しまなかった。つまりモートンといえど、ひとたび自己の樹立したテーゼが奴隷制擁護の宣伝に事後的に利用されることに関しては、それほど否定的な態度をとったとは言えないわけである。しかしだからといってこのことは、かれが最初から奴隷制のイデオログたらんと意図していたということを意味するものではないであろう。E. L. McKittrick, ed., *op. cit.*, pp. 128-129; W. Stanton, *op. cit.*, pp. 51-53; pp. 61-62; G. M. Fredrickson, *op. cit.*, pp. 76-77.
25. George H. Daniels, *American Science in the Age of Jackson* (Columbia University Press, 1968), Chapter III The Reign of Bacon in America.
 26. Francis Bacon, *Novum Organum* (1620), 桂寿一訳『ノヴム・オルガヌム』(岩波文庫), 104頁。
 27. 上掲書, 85-86頁 (訳は筆者の手で一部変更)。
 28. たとえば N. Reingold, ed., *op. cit.*, p. 40, p. 58 にみられる Thomas Say や John Torrey からアメリカ学派の S. G. Morton にあてた手紙は、当時の研究者がお互いに資料や標本を活発に交換しあっていたことを示している。
 29. *Ibid.*, p. 36.
 30. Richard Hofstadter and Walter P. Metzger, *The Development of Academic Freedom in the United States* (Columbia University Press, 1955), 井門富二夫・藤田文子訳『学問の自由の歴史 I』, 337-349頁。
 31. E. L. McKittrick, ed., *op. cit.*, p. 137; W. Stanton, *op. cit.*, pp. 156-158.
 32. Josiah C. Nott, *Two Lectures on the Connection between the Biblical and Physical History of Man* (Originally published in 1849 by Bartlett and Welford. Reprinted 1969 by Negro Universities Press, New York), p. 7.
 33. *Ibid.*, p. 17.
 34. *Ibid.*, p. 51.
 35. たとえばノートは論敵ブリチャードの挙げる事例を “Many supposed examples” “the supposed facts” と表現し、それらが信頼できないことをさらにイタリック体で (“are not to be relied on”) 強調裡に記している。 *Ibid.*, p. 27, p. 33.
 36. Van Evrie, *op. cit.*, p. 57.
 37. *Ibid.*, p. 59.
 38. 史家ダニエルスは当時ベーコンの方法という言葉でもって意味されていた事柄として(1)観察に基礎をおくという意味での empiricism. (2) hypotheses を排するという意味での anti-theoretical な態度. (3) 科学と taxonomy との同一視. の三点を挙げている。G. H. Daniels, *op. cit.*, p. 65.
 39. *Ibid.*, p. 66.
 40. G. Osofsky, ed., *op. cit.*, p. 110.
 41. J. C. Nott, *op. cit.*, p. 58, p. 67; E. L. McKittrick, ed., *op. cit.*, p. 135.
 42. Van Evrie, *op. cit.*, p. 58; G. Osofsky, ed., *op. cit.*, p. 105.
 43. Van Evrie, *op. cit.*, p. 58.
 44. Friedrich Engels, *Dialektik der Natur*. 田辺振太郎訳『自然の弁証法』(岩波文庫) 上巻, 61頁。
 45. ベーコン, 前掲書, 60頁。

46. 上掲書, 91頁。
47. 上掲書, 154-155頁。
48. 『旧約聖書』によればノアの箱舟は大洪水のあとアララテ山に漂着することになっているが、ブルームンバッハはこの山の近傍にそびえるコーカサスの南麓をもって人類祖型発祥の地とみなすに相当と考えたようだ。
49. the Great Chain of Being の思想は周知のように、あらゆる動植物は神によって配置され等級づけされた秩序にあるとみなし、そこではすべての存在は無限小の落差をもって最下層のものから人間へと段階的につらなり、さらにそこから無数のランクづけをもつ天使を経てついには神自身にまでいたると想定するものである。この連鎖の系列上、失われた輪というものはなく、すべて動植物はそれぞれ特定の位置を定められている。ホワイトらはこうした考えを人種関係に適用したわけである。W. D. Jordan, *op. cit.*, p. xxxvi.

50. W. Stanton, *op. cit.*, p. 30; H. S. Smith, *op. cit.*, p. 156.

モートンは *Brief Remarks on the Diversities of the Human Species . . .* (Philadelphia, 1842) の中でつぎのように述べている。エジプトの遺跡の示す証拠によって「われわれはまったく特徴を異にするいくつかの人種が今日とおなじような姿ですでに3500年まえのエジプトに存在していたという興味ぶかい事実を知る。そこには白人と=グロとが今日われわれがつね日頃目にするのと同じような身体特徴をもって相並んで描かれている。35世紀というこの巨大な時のながれはいずれの人種にもなんらの変化をももたらさなかつたわけである。この明確な差異のうかがわれる時期と、古代ヘブライの年代記にいう大洪水の時期とのあいだには、たかだか700年たらずの歳月が介在しているにすぎないのであって、ここからしてわれわれはどうしても前述したごとく、組織体 (organization) にみられるこうした相違は人類の分散 (大洪水以後の——筆者) とともに古いものであるという結論に達せざるをえない。」(G. Osofsky, ed., *op. cit.*, p. 113) この考えは *An Inquiry into the Distinctive Characteristics of the Aboriginal Race of America* (Philadelphia, 1844), p. 36 でも繰り返されている (以下 *An Inquiry* と略して引く)。

アメリカ学派の逆説は科学の領域のみならず、かれらの現実政治にたいする態度にも現われている。たとえばアガンは、真の科学者は科学上の問題を探究するにあたって、宗教的・政治的ドクトリンを顧慮することなくこれにたずさわるべきであって、「政治家」がその成果をどう利用するかにまでは責任を負わないという点をしきりに強調している。しかしこの言葉はその内容自体はたしかに正しいかも知れないが、当の科学者自身がこうした発言を口にしていう点で、すでにその姿勢のほうに問題が生じているわけである。E. Lurie, *op. cit.*, pp. 237-238.

51. たとえばノットの著作には “mental and physical differences” “mental and physical history” “moral and physical causes” “moral and physical peculiarities” “mental and physical character” “moral and physical character” あるいは “the physical, and consequently mental character of the negroes” といった表現が数行おきに頻出することもめずらしくない。E. L. McKittrick, ed., *op. cit.*, p. 127; L. Ruchames, ed., *op. cit.*, p. 464, p. 465; J. C. Nott, *op. cit.*, p. 31.
52. G. Osofsky, ed., *op. cit.*, p. 111.

モートンはインディアンに関する論考のなかでこの人種の特徴を “their organic, moral, and intellectual characters, their mode of interment, and their maritime enterprise” という五つの観点から考察し、moral traits としては、身内のあいだでは多弁だが見知らぬ者のあいだでは無口、逆境にたえる不屈の意志力、好戦的・報復的な性格といった諸点を、また intellectual faculties としては、モンゴル人種よりも劣っていること、強制的な教育に服することへの嫌悪、抽象的な事柄に推論をはたらかせることの不得手などを挙げている。いずれにせよモートンはある人種のうちに身体的なものと精神的なものとをつきまぜて在りな化させて捉え、しかもその精神特徴を記述する概念とはといえば、純粋に生物学的かつ=

ートラルな性格のものとはなっておらず、そこには文化的な価値判断が濃厚にまわりついでいると言ってよい。S. G. Morton, *An Inquiry*, p. 2, pp. 8-9, p. 12.

53. E. L. McKittrick, ed., *op. cit.*, p. 128.
54. J. C. Nott, *op. cit.*, p. 22.
55. Van Evrie, *op. cit.*, p. 135.
56. *Ibid.*, p. 197.
57. *Ibid.*, pp. 134-135.
58. 身体と精神とを直結させる思考法はドイツの解剖学者 F. J. ガルの創始になる骨相学の理論においてその代表的な成果を見出したとあってよく、それは頭蓋の形状からその人間の心的特性を言いあてうとする点で、いわばフィジカルな局面とメンタルな局面とを無媒介に架橋し、前者から後者を演繹せんとする試みの一典型であったとわいていい。この学説はすでに19世紀なかばにおいてすらその科学的妥当性に疑問が呈せられていたが、にもかかわらず骨相学的な思考じたいはなお深くアメリカ学派の脳裡を支配していた。モートンはその主著『クレニア・アメリカーナ』の末尾に当時の代表的な骨相学者G.クーム (George Combe) の「骨相学的見解」と題する一文を付論としてつけ加えることを諾し、「骨相学で言うところのインディアンの心的傾向と、頭蓋骨の発達状態とのあいだにみとめられる独特の調和」を認めたのであった。同様にノットもまたその著述のなかで、「骨相学上の議論の余地ある点にかんして私見をさしはさむつもりはないが」と一応の前置きはしつつも、「われわれは頭脳の大きさと形状は個人および人種の道徳的・知的性格と緊密に関連しあうものであり、前頭葉 (anterior lobes) の大きさと形状は(他の条件がすべて同じなら)知性をはかるひとつの指標と見做しうということ、すでに決着ずみの事柄であると考ええるものである」として、骨相学の命題を実質的には受け入れたのであった。W. Stanton, *op. cit.*, pp. 35-38; J. C. Nott, *op. cit.*, p. 36.
59. Van Evrie, *op. cit.*, pp. 80-83.

ベーコン哲学が云々されたのは、この期の自然科学界全般においてである。しかし亜流ベーコン主義に胚胎する方法的欠陥がもっとも顕著なかたちで現われやすいのは、植物学、鉱物学、地質学、古生物学といった学問分野ではなく、人間を直接の対象とする人種学であったとわいてよい。つまりそこでは価値観や偏見によって認識の曇らされる度合いはもっとも大きいわけである。
60. Harry L. Shapiro, "The History and Development of Physical Anthropology," *American Anthropologist*, volume 61, number 3 (June, 1959), pp. 371-379. 史家ハラーは次のように表現している。「人種の数をもっぱら枚挙するだけの作業からさらに一步進んで、19世紀の人間の学は精巧なる器具を用いて人種の特異性を確定せんとする人体測定学へと向かっていった。19世紀人類学の精華は人体測定学であった。」J. S. Haller, Jr., *op. cit.*, pp. 6-7.
61. モンテギューは人種の定義づけと研究方法についてさらに次のように述べている。すなわち「それは研究がまず着手され、その結果妥当な定義がもたらされるというのではなく、まず定義から始まるわけである。しかし言うまでもなく定義づけというのは研究の開始時よりも、その結果として初めて有効な意味を獲得しうるものであろう。」「これまで人類学者たちが数多の労多き人種分類の試みにたいして抱いてきた不満感も、結局のところ、なにかが多分どこかで間違っているはずだという根本的な疑惑を生みだすまでにははいたらなかった。もし誤りがあるとすれば、それは人類学者の方ではなく素材の方に、つまり分類対象である人類それじたいの方にあるのだと一般に想定されていたのである。」しかし人種概念が現実をそのまま写すかのようにそれと対応し合っているということを見明視してかかるほうがじつはおかしいのであって、誤りや不都合は“materials”よりも、まずもって人類学者の作り設けた“conceptual tool”のほうにあると考えてしかるべきであろう、云々。こういった批判的な姿勢や概念と現実とのあいだのギャップに関する意識など、わいてみればアメリカ学派にもっとも欠けていたものの一つである。Ashley Montagu, ed., *The Concept of*

Race (New York, 1964), p. xiii, pp. 5-6.

言うまでもないことであるが、事実そのものは客観的な意味を帯びているわけではないし、事実のうちに一定の意味が内在化しているわけでもない。事実による実証に先立ってすでに一定の観点なり仮説なりが論理的に前提され、そのうえで作業はおし進められているというべきであろう。ところがアメリカ学派の場合は、この自覚したいが希薄であるため、逆に自己の依るフレームや理論あるいはその時代の通念の影響を、もろにかつ無自覚的に蒙ることになる。つまりこの点ではかれらの事実主義は、硬直した理論にしがみつくと観念的な立場と結果的にはちがわないことになる。

62. J. S. Haller, Jr., *op. cit.*, pp. 19-34.

戦時下の人体測定の意義について、たとえばハラールは次のように結論づけている、「皮肉なことに奴隷を解放した戦争はまた19世紀社会の人種差別的な態度を正当化することをもまた助長したのであった。南北戦争中の人体測定のデータによって導き出された結論は、アメリカ社会秩序の保守的エートスと安定性を補強し、同時にまた新たな『科学的』態度を鼓舞することを促したのであった。」 *Ibid.*, p. 20.

63. Walt Whitman, *Leaves of Grass and Selected Prose*, ed. John Kouwenhoven (The Modern Library. New York, 1950), p. 42.

64. モートンは“ETHNOGRAPHY,—the analysis and classification of the races of men,—is essentially a modern science.”としてみずからの分野の斬新性を誇っている。S. G. Morton, *An Inquiry*, p. 3.

65. ノットはしばしば聖書の記述者たちは「宇宙の自然史」(physical history of universe)に関する知識など全然もちあわせてはいなかったという点を強調している。J. C. Nott, *op. cit.*, pp. 16-17, p. 53; H. S. Smith, *op. cit.*, pp. 158-159.

66. E. L. McKittrick, ed., *op. cit.*, p. 133.

67. S. G. Morton, *An Inquiry*, p. 3.

モートンの提示する事例がそれほど厳密であったわけではない。たとえば多元論のテーゼを論証するために、かれが列挙している様々な事例がそうである。一般に相異なる種 (species) のあいだにできた雑種は繁殖力をもたないとされている。したがってもし人類がいくつかの相異なる種から成り立っているとすれば、それらのあいだの雑種は不妊性を具えていなければならない。しかし実際にはどの人種のあいだに生れた混血も繁殖力ある子孫を生み出すという現象がみられる以上、すべての人種は同一の種に属しているということにならざるをえない。多元論者モートンはこの命題の妥当性を裏から掘り崩すべく、属 (genus) や種を異にする生物間にもじゅうぶん繁殖能力ある雑種が生れるのだという一例として次のものを挙げている。「ネコとテンのあいだの雑種。——ネコおよびこれと全く属を異にする動物のあいだにできた雑種の顕著な例がつぎに引用する一文に描かれているが、この記述はもっとも信頼のおける数種の科学雑誌に掲載されたものであり、充分確証のあるものである。すなわち、『ある飼いネコがベンサの一家庭から姿をくらませた。しばらく家を留守にしたあと戻って来て、一定の期間をおいて4匹の子を産んだが、そのうちの2匹はテンに酷似していた。その爪はネコのように引っ込むようになっていなかった。そして鼻はマツテンのように細長かった。同じ腹から生れたあとの2匹はずっとネコに似ていて、内に引っ込む爪と円い頭をしていた。これらは4匹ともテンのように黒色の脚、尾、耳をしており、食用に供するためというよりも、むしろ殺戮を楽しまんがために鳥や小動物を殺した。飼い主はこの種族を殖やそうと思いつき、飼いネコと交らないように意を用いて、その試みに大きな成功をおさめた。数年後かれはこの動物を百余匹も飼育するにいたった。モスクワ帝国博物学協会に献呈された標本は三、四代目の子孫で、第一代目の性質をことごとく保持していた。』結局この事例は生れた雑種の性質からその親をテンであろうと逆推しているだけのことにと過ぎず、これでは論証にも何にもなっていないというべきであろう。このほかモートンはカナリアとナイチンゲールのあいだに産まれた卵、ハクチョウとガチョウの雑種について

も言及しているが、要するにこれらはアメリカ学派が蔽密科学といい実証科学と称したものの内容がどの程度のものであったかを端的に示しているといえよう。S. G. Morton, *Hybridity in Animals and Plants, Considered in Reference to the Question of the Unity of the Human Species* (New Haven, 1847), p. 13, p. 17.

68. 史家ダニエルス *American Science in the Age of Jackson* 第V章の表題 (A Deluge of Facts)。
69. H. Butterfield, *The Origins of Modern Science 1300-1800* (London, 1957). 渡辺正雄訳『近代科学の誕生』(講談社学術文庫) 上, 20頁。

原稿受理 1981年9月20日

Summary

Scientific Method in the American School of Ethnology

Tadashige Shimizu

The American School of Ethnology has two conspicuous traits that conflict with each other. One is that in their scientific research this school always puts its trust in things of an empirical nature and shows a repugnance to idealistic metaphysics. They seek to cut loose the natural history of mankind from the Bible and to confine the validity of the gospel to the moral and ethical sphere. The other is that this school has played an important role as a formidable defender of southern negro slavery. By giving evidence of the negro's biological inferiority, they have furnished scientifically justifiable reasons for this peculiar system of the Old South.

This dual attitude of their hardheaded positivism and ideological demagogy can be said to have been caused by the scientific methods of this school. They seem to have completely denied abstract concepts and looked down on the thinking faculty itself, as they have excessively emphasized the palpable, immediate and physical facts. In consequence they have neglected to reflect and examine closely their own standpoint and conceptual tools, which had been deeply tainted with the days' racial prejudice. It may fairly be said that the "accumulation of facts" or the "Deluge of facts" collected by them was poured into the old ready-made mold or conceptual schema of racial hierarchy.